本書のもう一つの特色は地理教育学的考察である。終章では，青潮文化論を地理教育学的に考察すると，日本文化のアジア太平洋地域との連続性および日本文化の合理性の観点から重要な意義を有するとしている。評者にとっては，青潮文化論の重要性だけでなく，青潮文化論を地理教育においていかに展開するのかについても，より具体的に示してほしかった気がする。

上述の評者の感想は，地理教育学や民俗学が専門でない人文地理学的な立場からのものにすぎない。本書は，著者が長年取り組んできた地理教育学，地理学および民俗学の立場からの総合的な成果が集大成されており，それぞれの学問分野からみても重要な学術書として評価できよう。

（山下清海）

山下清海編著：『世界と日本の移民エスニック集団とホスト社会　日本社会の多文化化に向けたエスニック・コンフリクト研究』明石書店，2016年3月刊，336 p., 4,600円（税別）

日本においてエスニック地理学が注目されるようになったのは，1980年代も半ば以降のことといわれる。地理学の長い歴史からすれば，ごく最近生まれた新しい分野ではあるが，その黎明期からエスニック地理学の代表的研究者として活躍してきた編者と，同じくエスニック地理学に関わる9名の著者により執筆されたのが本書である。

本書の重要なテーマに「エスニック・コンフリクト」がある。聞き慣れないという向きもあるだろうが，要するに，移民と彼らが移り住んだ先のホスト社会（受け入れる側の多数派の社会）との間で生じる様々な摩擦である。その摩擦は，内面的な葛藤のレベルで抑えられることもあれば，物理的衝突をともなう紛争に至る場合もある。このようなエスニック・コンフリクトは，国境を超える移民が増加した現在，日本を含め世界各地で観察され，一部地域では深刻な問題となっている。

本書に集った合計10名の研究者は，世界各地のエスニック集団に関する数多くの業績をこれまでに積み上げてきた。彼ら／彼女らが，各地のエスニック集団とホスト社会との間で生じるエスニック・コンフリクトの地域的な特色を調査し，その要因・背景について考察することを目的としたのが本書である。

本書は12の章により構成される。Ⅲ章以降は分担執筆者による事例研究であるが，それに先立ちⅠ章「移民エスニック集団とホスト社会」（山下清海）では，編者自身によりエスニック集団の概念が定義され，エスニック・コンフリクトの類型化が試みられている。また本書で扱われる具体的事例について，「世界各地で増加している移民エスニック集団」および「日本国内のニューカマーの移民」と「ホスト社会」の間でみられるエスニック・コンフリクトであるとして，今後各章で展開される議論の範囲が示されている。本書を貫く二つのキーワードと議論の範囲が冒頭の章で整理されることにより，この章に続く日本や世界各地の様々な事例の議論に読者がスムーズに参加できるベースが提供されている。

Ⅰ章で議論の枠組みが提示されたのに続き，Ⅱ章「移民エスニック集団とホスト社会の分析キーワード」では，Ⅲ章以降の事例研究の研究視点や分析方法を理解するうえで役立つ九つのキーワードが紹介されている。キーワードごとに節が構成され，それぞれの節をⅢ章以降の分担執筆者が担当している。単なるキーワードの紹介のレベルではなく，エスニック集団とホスト社会の交渉とその結果生じるエスニック・コンフリクトについて理解するうえで重要な視点について，踏み込んだ解説が加えられている。本章で紹介される諸事象

や理論的解釈は，エスニック地理学研究者をはじめ，他の地理学諸分野や地理学以外の関連領域の学徒や研究者にとっても参考になる内容である。

Ⅲ章からⅪ章までは，海外および日本における事例研究である。Ⅲ章「2011年イングランド暴動の特性」（根田克彦）では，2011年にロンドン北部のトッテナムヘイル駅近くの警官による黒人射殺事件を契機に発生した一連の暴動が検証され，暴動と民族・貧困との関係の解明が試みられている。この暴動の特徴について，黒人差別をベースとしながら，格差拡大に不満を持つ貧しく低学歴の若者が民族に関わらず参加した暴動であったと締めくられている。結論自体興味深いが，結論に至る過程で，法務省や内務省の公的資料，民間機関の報告書などを駆使して緻密に段階を踏みながら実証する分析方法も参考になる。

Ⅳ章「変容する移民地区－パリ・グットドールの居住者層と多文化性の表象をめぐって－」（荒又美陽）では，パリ北部の移民集住地区グットドールを対象に，都市計画事業と居住者の生活との関係から地区の変容の分析が試みられている。多文化性に開かれた左派政権主体のパリ市が，低所得層のみでなく中間層も対象とした社会住宅を建設する都市計画事業を推進したことで，ボヘミアン・ブルジョアと呼ばれる多文化性に寛容な住民層がグットドールに居住するようになり，地区の変容が進行した。こうして高級化しつつあるグットドールではあるが，アジア・アフリカ系の人々は店舗の経営者や顧客となってこの地区で生活しており，移民の生活の場所としての特徴は維持されている。エスニック集団とホスト社会住民の混住が進行しているという点で，ソーシャル・ミックスの成功例であろうが，新住民らが要望したであろう監視の強化のもとで実現される混住を，著者は「制御された多文化性」と呼んでいる。移民との接触の歴史が長いヨーロッパにおいて移民と共存するうえで，対等で野放しの寛容さよりも，ある程度の制御が存在するほうが，移民とホスト社会住民が共存するうえで現実的なのであろう。

Ⅴ章「エスニック市場にみるウィーンのエスニック景観の動向」（加賀美雅弘）では，エスニックマーケットの形成過程とエスニック景観の動向が論じられている。ブルネン市場のように，もともとエスニック集団の日常生活商業施設に起源を有しながら，行政の整備事業により一般市民にアピールするエスニックマーケットに変貌したものもあれば，ナッシュマルクトのように18世紀に市民生活のための市場として誕生しながらも，次第にエスニック集団が関与するようになり，エスニックマーケットとして観光地化が進む市場もある。著者はこれらを①出身地から持ち込まれた生活様式や社会組織によって出現する景観，②ホスト社会における適応過程で意図的に作られる景観，の二つに類型化しているが，他方でロマのようにいまだ排斥の対象となりながら固有のエスニック景観を維持する集団の存在も指摘している。エスニック集団とホスト社会との関わり方は実に多様であり，両者の関係性を景観から解読する方法を考えさせられる内容であった。

話題はアメリカ大陸に移り，Ⅵ章「ロサンゼルス大都市圏の分断化とエスニックタウン」（矢ケ崎典隆）では，ロサンゼルス大都市圏で進行する多民族化とそれに起因する諸現象が解説されている。現在のロサンゼルス大都市圏では白人はもはや多数派ではなく，白人主体のホスト社会と，移民とその子孫が主体のエスニック社会の関係も変化している。変化の過程で発生した様々なエスニック・コンフリクトの事例や，エスニック集団が居住空間をすみ分けることにより登場した数々のエスニックタウンが，本章では紹介されている。エスニック集団がまるでモザイク状に住み分

ける様子を，著者は「分断化」と表現している。世界でこれまでにない多民族化を経験しつつあるロサンゼルスを知るうえで，本章は格好の資料となるであろう。

Ⅶ章「ホスト社会としてのケベックのディレンマ－「ケベックの価値」憲章をめぐる論争から－」では，フランス語話者が多数を占めるカナダのケベック州を舞台に巻き起こった「ケベックの価値」憲章をめぐる論争を起点に，ケベックのエスニック社会からカナダの多文化主義にまで踏み込んだ議論が展開されている。「ケベックの価値」憲章とは，独立派のケベック党が政権を担当した2013年に提案した法案である。憲章の中に州公務員が宗教的シンボルを身にまとうことを禁止する内容が含まれたため，ムスリムやユダヤ教徒などの批判を浴びた。元来ケベックのエスニック・コンフリクトはフランス語話者と英語話者の構図で語られるケースが多かったため，今回の事態から従来にない複雑な多文化社会を垣間見ることになった。またこの憲章を支持したのが英語話者よりフランス語話者であったという点も興味深い。その点を著者は，ケベックがアングロサクソン型多文化主義をもって解釈できる場所ではないとしている。今後多民族化が進行するであろう日本の将来を考えるうえでも，参考にしたい章である。

Ⅷ章「オーストラリアの難民政策」（吉田道代）では，難民・庇護申請者の処遇が政治的争点となっているオーストラリアが取り上げられている。アングロ・ケルト系のホスト社会と難民・庇護申請者のエスニック社会のコンフリクトを，庇護申請者向け収容施設を介して観察するという方法が採用されている。ホスト社会側からの記述が中心となっているが，政府が国民と庇護申請者に制御能力を示そうとする強権的態度が強調される一方，地元住民レベルでは庇護申請者に対する寛容性もみてとることができ，ホスト社会の他者に対する多様なまなざしを垣間見ることができる。

Ⅸ章以降は，日本における移民エスニック集団とホスト社会がテーマとなる。まずⅨ章「ニューチャイナタウンの形成とホスト社会－池袋チャイナタウンの事例を中心に－」（山下清海）では，中国からのニューカマー，いわゆる新華僑の増加により，池袋に形成されたニューチャイナタウンが扱われる。新華僑によるエスニック・ビジネスは同胞ビジネスとしての性格が強く，そのため新華僑は地元ホスト社会との相互関係が希薄で，それがエスニック・コンフリクトの原因になっている。このように説明すると，池袋という限定的な地理的空間で進行する現象のように受け止められるが，本章の記述は著者が日本のみならず世界各地の華人社会を対象に実施してきたフィールドワークにより得られた知見がベースとなっているため，随所に比較の視点がちりばめられており，深みのある論考に仕上がっている。

Ⅹ章「「花街」からエスニック空間へ－ホスト社会・在日朝鮮人・「ニューカマー」の関係－」（福本拓）では，ニューカマーのコリアンが集中する大阪市生野区の新今里を事例に，エスニック空間の形成とコンフリクト表出の背景が扱われている。かつて遊郭に代表された空間が韓国クラブ街へと変貌する様子を，資本の移動，建造環境の変容，人口移動との関係，前住者との関係から解読することが試みられている。土地所有権の譲渡のように入手の難しい情報を丹念に洗い出し，それをもとに建造環境の変容と人口構成の変化を証明する一連の手続きは，ぜひ参考にしたい。また不足する情報は聞き取りなどにより補い，ニューカマー主体の韓国クラブ街の建造環境の生産に，オールドカマーのネットワークが関与していた可能性にまで言及している。

Ⅺ章「エスニック集団成員とホスト社会との接点－ブラジル人住民の「日常」を分析する」（片

岡博美）では，静岡県浜松市を事例に，ブラジル人のホスト社会における日常の生活活動空間・時間を明らかにすることで，ホスト社会におけるブラジル人の生活の特質や課題を検討することが試みられている。個人レベルの生活活動日誌データを用いた時間地理学的アプローチにより，個人と同朋ネットワークやホスト社会との接点を解明する分析手法が独創的で興味深い。分析の結果，家族以外の同朋ネットワークへの帰属時間の限定性，消費行動に限定されたホスト社会への同化，といった特徴が明らかにされている。エスニック・アイデンティティが集団内で再生産されるのではなく，家族や知人内で閉鎖的に進められるということから，著者はブラジル人コミュニティが「解体コミュニティ」としての特徴を示すとしているが，それを日本社会全体の抱える問題と重ね合わせて問題提起しているところも含蓄がある。

最後のⅫ章「増加する在留外国人と日本社会－日本社会の多民族化に向けての課題－」（山下清海）では，これまで議論されてきた各地のエスニック・コンフリクトの事例を受け，日本の置かれた現状が編者自身により総括されている。在留外国人の増加にともなうエスニックタウンの形成，およびエスニック・コンフリクトの問題などが扱われているが，そこから伝わってくるのは多民族化しつつある日本社会の課題である。気が付けば「移民」と共生することが日常となっており，移民がもたらす資源と共存可能な場合もあれば，エスニシティの違いが摩擦を引き起こす場合もあることを，常日頃から自覚しておかねばならない状況に日本社会が置かれていることを認識させられる内容である。

読後感であるが，本書は高度な内容の専門書であるため，最終ページに至るまで集中力を欠くことができなかった。しかし読み終えての知的充足感は際立っていた。エスニシティに根差した摩擦がこれほど多様な展開を示しているにもかかわらず，またエスニシティの切り口は多々あるにもかかわらず，著者らがそれを分析し考察する態度には確かな一貫性があった。

その一貫性は，おそらく本書を貫く徹底した実証主義に生起するものであろう。本書に関わった10名の研究者は，おそらくは数十回以上のフィールドワークを実施し，データを収集している。そうして得られたデータは各者各様であるが，データ収集の際の目の付け所とデータ分析の際の切り口にははっきりした一貫性がある。入手方法も種類も千差万別のデータであるにもかかわらず，そこからは一様にエスニシティに関わる内容が抽出され，対象とするコンフリクトの種類により内容が選別され，最終的にエスニック・コンフリクトの議論に昇華されている。著者個々人の分析力や洞察力に感服するが，同時にこれほど雑多なテーマを一貫性のある専門書としてまとめ上げる編者の力量にも頭が下がる。様々な体系的手法が一冊にまとまっている本書は，エスニック地理学に関係する評者にも大いに参考になったが，若い研究者や地理学を志す学生にとってなおさら役立つことであろう。

今後の日本では，本書で扱われたようなエスニック・コンフリクトがますます増加するであろう。本書に代表されるエスニック地理学研究者による業績の蓄積は，そのような時に必ずや日本社会に還元されるはずである。

（石井久生）

アンガス・ライト，ウェンディー・ウォルフォード著・山本正三訳：『大地を受け継ぐ　土地なし農民運動と新しいブラジルをめざす苦闘』二宮書店，2016年4月刊，401p., 4,800円（税別）